



Title	井戸武實さんを追悼する
Author(s)	高鳥毛, 敏雄
Citation	井戸武實の歩みと追悼集. 2025, p. 45-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

井戸武實さんを追悼する

高鳥毛敏雄

関西大学社会安全学部・社会安全研究科教授

I. はじめに

井戸武實さんを追悼するにあたり亀田和彦先生、逢坂隆子先生、高野正子先生のことを触れる必要があります。特に亀田先生は井戸さんに公私にわたりとても大きな影響を与えた方でした。井戸さんがいりん地区で活動することとなったのは逢坂隆子先生がホームレス健康問題研究会を立ち上げて、行政や民間団体と協働してホームレス者に対する健康支援を行うためにNPOヘルスサポート大阪を設立したからでした。また大阪公衆衛生協会の事務局長としてストップ結核パートナーシップ関西（以下、STBK）の活動を行うことには協会会长となった高野正子先生が協会の結核事業にいろいろとサポートしてくれたことがありました。また、大阪の結核対策やストップ結核パートナーシップ関西の事業を行うようになった背後には岩崎龍郎、島尾忠男、森亨、石川信克の歴代結核研究所長の存在があることを忘れてはならないことです。ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップにあたってこれまで結核予防会及び結核研究所の先生方が困った時にはいつも支えてくれました。

井戸さんの人生は3つに分けることができます。最初の時代は、大阪府に採用されて保健所の診療放射線技師として結核検診に邁進されておられた時期です。この頃の井戸さんの詳細は触れません。次の時代は亀田先生とともに歩んでこられた時代です。当方が井戸さんと顔を合わせることとなったのはこの時期からのことです。第3の時代は、ホームレス者の結核対策を始めた時期です。これが、NPOヘルスサポート大阪、大阪公衆衛生協会、そしてストップ結核パートナーシップ関西（以下STBK）の活動、結核勉強会となっていました。2013年に（公）大阪公衆衛生協会を事務局として第1回のSTBKのワークショップが開催されました。その企画運営を担当したのが結核勉強会のメンバーでした。2020年に新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の流行時はZOOMを使った開催となり、そしてCOVID-19流行が落ち着いた2023年度開催のSTBKのワークショップは特別なものとなりました。3年ぶりの対面形式で大阪大学中之島センターにおいての開催となったからです。これが井戸さんを事務局とした最後の開催となりました。ワークショップ後に行った打ち上げの場は記憶に残るものとなりました。一人の人間として過ごされている井戸さんの素顔の側面を垣間見せてくれたからです。詩吟をしているということは日頃聞いていましたが即興で吟詠して下さいました。誰もが予想していなかったことでした。これが井戸さんの雄姿の見納めとなってしまいました。2024年度のSTBKのワークショップは事務を担当してこられた井戸さんがいない中での開催となりました。井戸さんの人生を振り返ることは日本の結核対策の温故知新になると思います。また追悼にあたり結核に当方がなぜ関わり、井戸さんとお付き合いしてきたのかについて書く必要があると考えました。そのため、当方の文章だけが追悼を超えて長文となってしまったことをお許しいただきたい。

2. 結核との関わり

井戸さんと一緒に仕事をすることとなったのは結核に関わったことからでした。結核との関わりをたどると学生時代のことを書かざるを得ません。発端は入学して間もない4月に冷やかしの気持ちで阪大病院皮膚科別館二階の農山村医療研究会の部室の説明会に顔を出したことです。サークルの説明会に顔を出すとすぐに居酒屋に連れて行かれました。それから毎週火・金の2回の部会に参加することとなりました。部会が終わると毎回JR大阪環状線福島駅と国道二号線の間にある居酒屋の「吉野屋」に行くのが慣例でした。数回休むと安否確認の電話があり、やめるにやめられず、そして3年生の時に部長にさせられてしまいました。今流行の悪徳商法の勧誘のようです。サークルは夏に高知県の山間部の夏期休業中の地域の小学校の体育館と調理室などを借りて2週間あまり、広大な面積の山肌に散在している100世帯あまりの家々を訪問して家族構成、職業、健康状態、受療状況など聞き取り、世帯台帳をつくりました。後半は医師、保健師、検査技師の諸先輩に来ていただき健康診断を実施しました。活動は先発隊、本隊、後発隊で構成されていました。先発隊は、高知県庁、管轄の保健所と村役場、そして地区の区長さんにご挨拶に伺いその年の活動の受け入れをお願いし調整することが役割でした。先発隊の1週間後に本隊が入りました。後発隊は9~12月の間に現地に行き、夏の活動の報告を行い、現地の変化を調べ、次年度の活動のお願いをするのが目的でした。部長とされたので年に何度も高知県に行くこととなり、実家（能登町中斎）の墓参りもままならない学生生活となってしまいました。サークルの前身が多田羅浩三先生のつくられた「大阪大学アジア医学踏査隊」であったころからゴールデンウィーク期間に大阪大学微生物研究所ライ部門の先生（伊藤利根太郎教授または助教授や講師）にご同伴いただき香川県の離島のハンセン病療養所大島青松園に一泊二日で行くことを年間行事としていました。これはサークルの部員勧誘を兼ねていました。学生時代の活動から先輩諸氏や公衆衛生学教室の諸先生と顔なじみとなっていました。当時サークル顧問は公衆衛生学教室の朝倉新太郎先生でした。活動には高知県や新聞社から助成金をもらっていました。また、健診機器や機材は阪大病院や機器メーカー、機材搬送のためのトラックはトヨタレンタリース大阪にご支援をしてもらいました。そのために公文書の依頼文が必要であることから公衆衛生学教室教授の印鑑をもらいに教室に毎年お願いに行っていました。これが結核に関わる前段の話です。

3. 学生時代の諸先生方に世話をなる

在学中に便利に利用させていただいた公衆衛生学教室の諸先生方に全面的に頼らざるを得ない事態となりました。5年生時に腰痛と足のしびれがひどくなり阪大病院整形外科に受診したところ脊髄腫瘍が疑われました。卒業試験と国家試験を控えており入院手術は国家試験終了まで延期すること致しました。卒業試験は何とか終えたのですが、3月にある国家試験までは一人暮らしが困難な状況となり、京都三条の同級生の自宅に転がり込み、国家試験会場にも同伴していただきました。そのおかげで受験ができました。翌日阪大病院に入院し、手術を受けました。大手術となり脊髄損傷の後遺症もひどく医師から一生歩くことができないと宣告されました。そこを救ってくれたのが公衆衛生学教室の張知夫助教授でした。適切なりハビリ病院を探していただき2か月入院してリハビリに励み、何とか自立生活が可能なまでになることができました。今後のことについても大阪府衛生部公衆衛生課

の矢内純吉課長に相談していただいて大阪府に入職することになりました。このことが結核と出会い、さらに亀田先生と井戸さんと出会うことにつながることとなりました。

4. 結核検診との出会い

大阪府は自治医科大学の第一期生を受け入れるために1978年に新採医師の4年間の初期研修制度を設けていました。その制度を活用し最初の2年間は大阪府立成人病センター調査部の藤本伊三郎先生の下で勉強することになりました。調査部はがん登録とがん対策を主としたところでした。集団検診部では胃がん検診や大腸がん検診をルーチンワークとしていたので、私も胃がん検診の業務に入りました。配属された部屋には、大島明先生（調査部長を経て、現在は大阪成人病予防協会専務理事）、日山興彦先生（阪神淡路大震災で死亡）、津熊秀明先生（自治医科大学一期生）、生方享司先生（当時は東神戸病院からの研修医、その後神戸市医師会理事、洪南クリニック院長退職）がいました。翌年に祖父江友孝先生（国立がん研究センターを経て大阪大学環境医学講座教授、現食品安全委員会委員）が鈴木隆一郎先生の下に来られました。

調査部では肝がんと肺がんの対策を主要な研究テーマとしていました。大島明先生から大阪府布施保健所の結核検診受検者台帳があるのでこれを使って肺がんのリスク評価をしてみたらどうかと声をかけて下さいました。結核検診の受検者をがん登録の記録と照合して肺がんのリスク評価と肺がんと診断された胸部X線写真を再読影して評価作業をすることになりました。これが結核検診の胸部X線写真との出会いとなり、さらに保健所で結核登録票との出会いになりました。

5. 結核検診受検者の胸部X線間接写真を見る

結核検診受検者をがん登録と照合し肺がんに罹患ないし死亡された方の胸部X線写真を探すこと、また患者の登録票を調べるために大阪府布施保健所（東大阪市西保健所、現西保健センター）に通うこととなりました。当時の保健所長は中村太郎先生、保健予防課長は上田博三先生（その後厚生技官になる）で、結核対策の詳細について時間がある時に教えてくれました。結核患者と診断されると医師は発生届け出を保健所に提出し、届け出を受けた保健所は登録票を作成していること、登録患者に保健師が面接して発見や診断までの状況を聞き取り、さらに登録後の通院治療や生活の様子、患者との接触者の情報と健診結果が登録票に記載されていることを知りました。そういう作業をしたことが結核対策の仕組みについてもっと知る必要があると思うことにつながりました。保健所やその職員のことについては学生時代に高知県土佐山田保健所（現高知県中央東保健所）に出入りしていたのでよく知っていました。当時所長の石川善紀先生に懇意にしていただき所長の官舎に何度も泊めていただきました。また所長が不在の折には保健所の宿直室をおかりして寝泊まりさせていただいたことも何度かありました。しかし、保健所の結核業務の詳細に関わったのは今回がはじめてでした。

6. 保健所の結核検査協議会に関わる

調査部におられた自治医科大学一期生の津熊秀明先生は、府庁から要請され大阪府枚方保健所の月2回あった結核検査協議会の事前診査と診査結果を保健師に伝えるために出かけていました。この仕

事を引き継いで欲しいと言われ代わりに枚方保健所に月二回行くこととなりました。枚方保健所の結核診査協議会に提出された患者の胸部X線写真を事前にチェックし、診査会委員や保健師に説明するだけでは物足りなかつたので、提出された胸部X線写真を鑑別診断し肺がん疑の者をピックアップして論文として発表いたしました。これが、羽曳野病院の山口亘先生や亀田和彦先生の目に止まり両先生とのお付き合いがはじまることとなりました。

7. 東京都清瀬市で結核のことを学ぶ

亀田和彦先生は結核に関心があるのであれば結核予防会結核研究所に行くべきと強く勧めて下さいました。府庁の担当課長に相談したところ行く必要はないと反対されましたが、調査部の藤本伊三郎先生が課長を説得して下さり1982年1~3月の2か月間東京都清瀬市の結核予防会結核研究所で勉強する機会を得ました。当時研修生は少なく6人程度でした。3人は東京都から派遣された医師でした。他の2名は鹿児島県と高知県からの医師でした。森亨先生は茨城県水海道保健所から戻って疫学科長となられたばかりでした。帰阪すると藤本先生が、結核予防会大阪府支部の岡田静雄先生を紹介して下さり、週1回淀屋橋にある結核予防会の読影室に行き、集団検診の間接写真を岡田先生の読影前に読み、それをチェックしていただきました。岡田先生の読影スピードはとても速く毎日数千人の間接写真を読影しておられる読影の達人でした。その後、しばらくして亡くなられています。

8. 大阪府立羽曳野病院で結核患者を診療する

亀田先生は結核患者を診療した医師でないと一人前ではないと諭され2年間羽曳野病院に臨床医として勤務することとなりました。同時期に自治医科大学4期生の土生川洋先生がいました。外科医となるのが夢だったようですが認められず病理部に所属していました。亀田先生は若い医師を集めた結核勉強会を行っており、土生川先生とともに参加させられました。WHOのトーマンの書いた結核対策のQ&Aの英語の本の輪読だったように思います。羽曳野病院ではRICUの木村謙太郎先生と川幡誠一先生、研究部門の露口泉夫先生、高嶋哲也先生(免疫学)、さらに肺がんグループに所属していた高田実先生、工藤新三先生(現大阪社会医療センター付属病院医師)にご指導をいただきました。工藤先生は亀田先生の結核勉強会に参加され、肺がんグループの医師でしたが結核診療に熱心で亀田先生にとても気に入っていたと記憶しています。亀田先生と仕事をしたことが井戸さんにつながることになりました。羽曳野病院後、大阪府茨木保健所及び松原保健所の保健予防課長をしました。大和川を挟んで大阪北部と大阪南部の保健所を勤務させていただいたことが大阪でも地域により保健所の雰囲気が異なっていることがわかりました。保健所在職時は、的場さん、三浦さん、大町さん、近本さんの各診療放射線技師と一緒に仕事をしました。井戸さんとは面識はありませんでした。

9. 井戸さんと顔あわせることとなる

大阪大学医学部公衆衛生学教室の教授が朝倉新太郎先生から多田羅浩三先生に代わりました。多田羅先生が就任されると電話がかかってきて大学の仕事を手伝いなさいと言われました。大阪府は異動に強く反対しましたがそれを多田羅先生が押し切り大学に戻されました。大学では結核を研究テーマ

とすることは認めてもらえませんでした。但し兼業として保健所の結核業務と関わり続けることとなりました。大阪府保健所は胸部X線検診車の「はと号」を使った定期外検診を実施していましたが、写真の読影医師が高齢化していなくなっていたからです。もと勤務していた診療放射線技師から読影に来て欲しいと懇願されたからです。

この頃、井戸さんは保健所の診療放射線技師でしたが、府庁の結核係の診療放射線技師の柳本さんが急死され、その代わりに保健所から府庁に異動されていたように思います。本庁では井戸さんは、大阪府医師会に委託して実施していた医師研修、養護教諭を対象とした結核研修会、結核予防会に委託して実施していた保健所の胸部X線写真の精度管理事業、さらに大阪結核病学研究会（1967年から実施）を担っていたように思います。そのため井戸さんから大阪府が実施している結核研修会の講師を頼まれるように会う機会が多くなりました。

10. 亀田先生がつくった大阪の結核コミュニティー

亀田先生は大阪の民間病院（日生病院）に勤務されてから、結核予防会結核研究所附属病院に移られていきました。大阪市の撫井賀代先生（現豊橋市保健所長）のお母さん（看護師）と亀田先生が大阪の同じ民間病院で勤務していたようです。結核研究所付属病院に勤務していた亀田先生に結核研究所長の岩崎龍郎先生が、「大阪に戻って、大阪の結核の問題の解決のために尽力してくれないか」とお願ひされたそうです。そのため亀田先生は1974年に大阪府立羽曳野病院の医師として赴任されることになりました。羽曳野病院は1967年頃から治療期間の短期化の研究と実践に取り組んでいた全国有数の病院でした。山本和男院長は、「結核患者が入院を拒否する、また治療を自己中断するのは、結核の入院期間や治療期間が長過ぎるからである」と考えていたようです。亀田先生は、その山本院長の入院や治療期間の短縮化をする仕事を引き継いでいました。

また、岩崎先生に大阪に戻る折に、保健所の医師や保健師の教育が大事だからそれにも力を注いで欲しいと言われていたようです。そのためか亀田先生は保健所長や保健師との勉強会に熱心に取り組んでいらっしゃいました。久池井暢先生、堀井富士子先生、大塚順子先生の3人の女性保健所長も亀田先生が育てた先生で、当方にいろんなことを教えてくれました。亀田先生は、保健所長と勉強会をするだけではなく家族検診（現接触者検診）の共同研究を行い、学会発表や論文発表にも取り組まれていました。また亀田先生は保健師の結核教育に特別に取り組んでおられました。これには大阪府の保健師の方からの強い要望もあったようです。この時期の大阪府の公衆衛生マインドを持った保健師は亀田先生の結核勉強会のメンバーといっても過言ではない状況でした。

大阪府の保健所の医師や保健師の関わりについて記してきましたが、結核の医師人材の育成にも力を注いでいました。羽曳野病院（現地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪はびきの医療センター）を亀田先生が退職した後、病院長は露口泉夫先生となり、結核内科はアレルギー内科の高嶋哲也先生が引き継がれました。高嶋先生は結核専用の外来診療棟を建設しています。また、羽曳野病院で結核診療を担っている永井崇之先生や田村嘉孝先生は高嶋哲也先生が育てた医師です。

現在の結核勉強会には羽曳野病院の橋本章司先生が参加してくれていますが専門はアレルギー・免疫学の医師ですから露口泉夫先生や高嶋哲也先生のDNAを引き継いでおられるように思っています。

11. 診療放射線技師を超えた存在となる

亀田先生は大阪府の保健所長や保健師や羽曳野病院の結核臨床医を育てただけではなく公私にわたり深くつながり育てた人間は井戸武實さんだったと言っても過言ではないと思っています。1990年代の大阪府庁の結核行政は井戸さんと亀田先生が進めることとなっていたように思います。過去において府庁の兼務医師として笹岡明一先生、山口亘先生などがいらっしゃいましたが、井戸さんが府庁に異動された時には亀田先生に代わっていました。亀田先生の結核コミュニティーに井戸さんが入ることとなり、井戸さんは一人の診療放射線技師という存在からそれを超えて保健所長や保健師及び結核対策全般に関わることができたことになったように思えます。亀田先生は、公衆衛生マインドを身につけた人情味のあった不思議な先生でした。井戸さんが亀田先生に寄り添っている姿を拝見するたびに、井戸さんの育ての親、結核の師匠は亀田先生なのだなあと感じさせられました。晩年は井戸さんが亀田先生を支える立場となり、亀田先生は奥さまが亡くなられてから一段と井戸さんを頼りに過ごされました。亀田先生は2018年4月3日に享年89で逝去されました。

12. 大都市の結核対策の研究と対策が進められる

1995年の阪神淡路大震災、1996年の堺市学童集団下痢症が発生しました。これが、当方の人生に結核とは別に新たな公衆衛生への道を歩ませる想定外の出来事となりました。当時公衆衛生領域には健康危機管理という業務は位置づけられていませんでした。この事態に公衆衛生の人間として傍観して良いのかと教室の会議で問われ大学院生を連れて忙殺されることになったからです。現在関西大学社会安全学部にいることになったのはこのことがあったからです。

1996年の秋頃時期を見計らったかのように結核研究所の森亨先生が「東京都台東区や新宿区、大阪市西成区など大都市の特定地域の結核罹患率が増加してきている。分担研究として大都市の特定地域の結核の実態調査と対策のあり方の研究を手伝ってもらいたい」という内容の電話をしてきました。そのため、全国の特定地域を管轄する保健所の医師を集めた研究会を組織しました。皆さんが知っている研究協力者として加藤誠也先生（現結核研究所長）、神戸市保健所の白井千香先生（現枚方市保健所長）、大阪市浪速保健所の撫井賀代先生（豊橋市保健所長）、大阪府立公衆衛生研究所の田丸亜貴さんなどがいらっしゃいます。この時期はまた不動産バブルが崩壊して平成不況に突入していました。

13. ホームレス問題研究会とホームレス者の健康診断をはじめる

大阪のみならず全国的に都市部にはホームレス者（野宿生活者）が増え、大阪でも淀川や大和川の河川敷、大阪城公園、長居公園など至る所にブルーテントが拡がっていました。この事態に対し、四天王寺国際佛教大学（現四天王寺大学）の逢坂隆子先生はホームレス問題研究会を立ち上げられました。そして、研究費を獲得して野宿生活者の健康調査と健康問題の研究事業をはじめました。医師、保健師、診療放射線技師やボランティアを集めて野宿者の健康診断と健康調査を実施しようとすることになりました。野宿者の低栄養、高血圧、糖尿病などに着目して健診をはじめたのですが、胸部X線検査で有所見者が多いことから次第に結核検診に特に力を注ぐことになりました。これには保健行政担当者を巻き込むには結核問題が重要との共通認識があったこともありました。

14. あいりん地区の高齢者特別清掃事業就労者の結核検診をはじめる

2002年にホームレスの自立の支援等に関する特別措置法が制定され、河川敷や公園のホームレス者が少なくなりました。他方であいりん地区の野宿者はあまり減っていませんでした。そこで、あいりん地区を活動の場とすることとなっていました。まず、大阪市が釜ヶ崎支援機構に委託して実施している「高齢者特別清掃事業」の就労者を対象として健康診断を行うことを計画いたしました。特別清掃事業を請け負っていた釜ヶ崎支援機構の指導員は、就労者の中に脳卒中で倒れる、循環器疾患で死亡する者がいることに困っていたことから循環器系疾患の健診の実施を望んでいました。結核検診の実施には積極的ではありませんでした。そこで、ホームレス問題研究会のテーマとして地域の団体を招いて結核問題が深刻であること、ホームレス者の健康問題として結核問題の解決がとても重要であることなどを繰り返し取り上げ、結核対策と結核検診の重要性について認識していただきました。初年度の健診では循環器系の検査が終わると、胸部X線検査を受けずに帰る人が多い有様でしたが指導員の理解を得たことにより次年度はほとんどの者が受検してくれるようになりました。また、初年度は間接撮影の検診車を使ったことから現像して読影するので日を要したことが結核疑いの多くの者を受診に結びつけることができなかった要因でした。そのため、次年度からCR検診車を使い、その場で結核が疑われると付き添って市立更生相談所（あいりん地区の特別の福祉事務所）に連れて行き、医療扶助の手続を行い、病院に車を待機していただき確実に医療機関に結びつける体制をつくりました。その結果、有所見者や要精密検査の者のほとんどが医療機関につながることとなりました。健診費用は黒田研二先生の研究費から支出していただきました。黒田班の研究事業により、野宿者の結核問題は「どうやっても解決できない」という固く思い込んできた常識が見事に覆りました。

15. 大阪市があいりん地区を含めた結核対策基本指針を示す

大阪市は2001年に結核対策基本指針を策定しました。これは画期的なものです。その指針の中にあいりん地区の結核対策が、大阪市の結核対策の肝であると明確に位置づけて取り組むことしてくれたからです。ここに至るまでに1996年に大阪市においても腸管出血性大腸菌の流行があり大阪市の保健担当局内に感染症対策室（室長は大阪市立総合医療センター感染症センターの阪上賀洋先生、室員同医療センター検査部長の巽陽一先生）が設けられたこと、さらに大阪市のあいりん地区の野宿者に赤痢が発生したこと（1998年5月～1999年4月に真性赤痢患者186名、疑似赤痢患者46名）がありました。大阪市は2008年の夏季オリンピックの誘致を目指していたこともありあいりん地区的結核問題や感染症対策に力を注がざるを得ない政治行政的な立場に立たされていました。大阪市は結核問題の解決のために、大阪市の結核の疫学分析を結核研究所に委託し、その報告書を作成してもらっていました。それに基づき関係者を集めた専門委員会を設置してようやく大阪市結核対策基本指針の策定と対策の評価委員会の設置に至ったのでした。結核研究所は、巽先生にもニューヨーク市の結核対策を視察してもらい、結核問題はあいりん地区であっても解決可能であることを認識させる働きかけをしていました。巽先生はその後大阪市立北市民病院長、市の病院局長になられています。

ところが、大阪社会医療センター付属病院が結核患者の診療をしないという状況には変化がなく、結核患者は域外の遠方の病院に入院させる対応が続いていました。大阪市は、大阪社会医療センター付属病院に補助金を出して、午後に内科外来の空いた診察室を使って菌陰性結核患者の「あいりんDOTS事業」を委託実施しました。大阪市保健所の保健師の有馬和代さん（現太成学院大学）が担当し、DOTSを行う看護師は大阪市が雇用した非常勤看護師でした。これまで大阪社会医療センター付属病院は菌陰性の患者であっても結核患者と診断される機械的に転院させていたことが少し前進したこととなりました。ところで、大阪市が地区で実施していた結核の「あいりん健診」は間接撮影のX線撮影車を使ったものでした。そのため、有所見者の多くが治療につながっていませんでした。そこで黒田研二先生の研究事業の資料を持って大阪市環境保健局長室に伺い、CR検診車を使うことにより有所見者のすべての者を医療に結びつけることができたことを説明させていただいたところ、大阪市はあいりん地区における結核健診をCR検診車を使ったものに切り替えてくれました。

16. NPO ヘルスサポート大阪が設立される

あいりん地区の結核対策の大きな問題点として結核の治療期間が半年～1年と長いために治療脱落者が多いくことがありました。結核患者に治療終了するまで入院を強いていたことにより自己退院者が多いくことにつながり、地区に戻っても結核患者を地域内で診療してくれる医療機関がないという状況が続いていました。つまり、一つの問題は、地区に帰った患者を受け入れてくれる宿泊施設がないこと、二つ目の問題は結核の外来診療を引き受けてくれる医療機関がないこと、三つ目の問題は、住所不定の患者はどこにいるのかわからない者もいて、保健所保健師だけでは服薬支援が難しい状況にある、ということが残されていました。そのためにその課題を克服するにはNPOをつくって結核対策を支援する必要があると判断しました。それがNPO ヘルスサポート大阪（通称、HESO）でした。理事長は矢内純吉先生（元大阪府環境保健部長）になっていただき、代表は逢坂隆子先生でした。事務局長には西成区のホームレス者の社会的支援活動を行っていた西森琢さんに就いていただきました。

17. 大阪市保健所に結核対策担当医師が置かれる

大阪市は結核対策基本指針を策定してあいりん地区の結核対策を進めてくれるようになりました。しかし大阪市保健所内に結核対策を指導する専任医師がないことが課題となっていました。当時、結核研究所長になられた石川信克先生は、東京都の新宿区・荒川区・台東区、大阪市の西成区の野宿者の結核問題に自ら関わっていました。また結核研究所におられた下内昭先生のご家族は神戸におられることから大阪市の結核問題に関わってもよいと考えていることがわかりました。経緯はわかりませんが石川先生と大阪市との話で下内昭先生が大阪市保健所の結核対策の責任者として赴任されました。NPO ヘルスサポート大阪初代事務局長の西森琢さんを紹介して下さったのも下内先生でした。下内先生が赴任された時の保健所の担当課長は半野田孝郎さん（その後大阪市西区長を経て更生保護施設愛正会職員となられている）でした。半野田さんは事務職員を超えて熱い思いを持たれた方で、下内先生と一緒にあいりん地区の実態を見て回り野宿者の生活実態にあわせた結核対策に大きく進展させていただいたと思っています。この時期、NPO の事務局長に就任していただいていた西森琢さん

が退職されてしまいました。その後事務局長を引き受けていただいたのが井戸さんでした。

井戸さんはNPOヘルスサポート大阪の事務局長となると、あいりん地区の事務所に毎日通うことにより見事に地区に溶け込んだくれました。あいりん地区の諸団体の方々からも信頼される存在になりました。西成労働福祉センター、NPO釜ヶ崎支援機構、サポートイブハウス連絡協議会、大阪社会医療センター付属病院、大阪市保健所あいりん分室、大阪市立更生相談所、西成市民館、ふるさとの家等の関係職員と顔なじみとなられるようになられていきました。また、あいりん地区の野宿者とも顔なじみとなっていました。NPOのDOTS事業は、大阪府を退職された看護師や保健師を雇用して実施していましたが、それらの看護職の相談役にもなっておられました。井戸さんは、あいりん地区的状況について多くの人々の要望を受け、関係機関を調整して研修や教育の機会を設けることにも取り組まれていました。あいりん地区で「水を得た魚」のように過ごされていた感じがしています。

18. あいりん地区における結核診療体制が進展する

あいりん地区の結核対策の課題として地区内に結核患者の診療をしてくれる医療機関がないことについては前述しました。発見患者は、和歌山県、市外の医療機関に治療完了するまで入院してもらっていました。そのために自己退院者が多く、再発者が多いという状況が続いていました。あいりん地区には大阪社会医療センター付属病院がありましたが、結核患者の診療はしてもらえない状況がありました。その理由は病院の医師は大阪市立大学医学部附属病院（現公立大阪大学附属病院）からの派遣に頼っており結核患者を診る病院となると結核の感染リスクが高くなると恐れ、来てもらえないなると考えていたようでした。しかし、病院の受診者に結核合併患者が多くいることを自ら経験し、院内で結核外来が必要であると考えている医師がいることがわかりました。副院長兼整形外科部長の中田信昭先生でした。また、病院事務局の総務課長も創立時はアルコール依存症や結核患者の診療する病院としてスタートしたにも関わらず現在全く対応できていないことを何とかしないといけないと考えていることがわかりました。結核外来を行うことの理解が得られたのですが、結核診療を担当していただく医師を探す必要がでてきました。白羽の矢を当てたのが亀田先生でした。羽曳野病院を退職してから結核患者を診療したいと言っていると聞いていたので亀田先生にお願いしてみましたが、ホームレス者は言うことを聞いてくれないので診療したくないと断られてしまいました。しかし、井戸さんを通して繰り返し説得し、困ったら井戸さんがサポートするとの条件で引き受けただけました。大阪社会医療センター付属病院で結核外来がはじまりました。しかし、社会福祉法人大阪自彊館の診療所医師が退職し、その後に亀田先生がいかれることとなり、結核外来を担う医師がいなくなりました。そこで当方が週1回月曜日に外来診療を担当することとしましたが、当方も関西大学に異動したことで続けられなくなりました。そこで後任を探すまでは齋藤忍院長（消化器内科、肝臓病の専門医）が外来を引き受けることとなり、その後市立大学呼吸器科を退職された工藤新三先生が担当してくださいされることとなり、現在に至っています。2019年に大阪社会医療センター付属病院が立て替え移転して新病院となりました。新病院には感染症病床4床が設置され、大阪社会医療センター付属病院は名実ともに結核診療に対応できる病院となり、あいりん地区の結核対策の中心医療機関となっています。隔世の感があります。

19. ニューヨーク市が新たな結核対策のイメージを提供してくれる

21世紀に入り、世界と日本の結核対策は大きく変化することとなりました。米国において大都市で結核患者数が激増したためにWHOのDOTS戦略の考え方と新しい生命科学の検査技術や診断技術を導入した結核対策が進められ、成功をおさめています。結核研究所は、1999年に厚生省から予算を得て、先進地に学ぶ結核ツアーをはじめました。参加者は、国立の結核療養所の幹部医師、保健行政の医師及び保健師、結核予防会の医師及び保健師でした。毎年、ニューヨークやサンフランシスコに行って米国の新たに立て直した結核対策に触れさせ、時代が変化したことを実感させるという戦略だったように思われます。日本の結核対策に影響を与えていたる結核予防会、国立療養所、保健行政の幹部職員が同じ目で米国の結核対策を見聞きしたことが、保健所、病院、予防会の関係者が短期間に新しい結核対策のイメージを共有することにつながることとなりました。私も2000年のニューヨーク市の結核対策の視察旅行に参加させていただきました。

20. 結核対策を担う医師が現れる

大阪の結核対策は、当方が大阪府に入った時は保健所の結核業務の多くは羽曳野病院の山口亘先生が担っていました。山口先生は結核業務を担う後継者を育てるここまでしていませんでした。それに對して亀田先生は結核対策を担う人間を育てるにも力を注いだ先生でした。亀田先生が羽曳野病院を退職された後、病院長となられた露口泉夫先生と内科部長になられた高嶋哲也先生が二人三脚で進めていかれました。高嶋先生の下に自治医科大学卒業の永井崇之先生、田村嘉孝先生などが結核診療を担うようになり、その後多くの自治医科大学の卒業生が結核診療を支えています。

田村先生は羽曳野病院での研修の後、大阪府庁の保健予防課の結核担当医師として配属されました。府庁の結核担当部署に専任の医師がいるようになったことがとても大きな意味がある時期でした。胸部X線検査所見を重視した結核対策から患者の結核菌検査所見を重視（抗酸菌同定検査、薬剤感受性検査）したものに劇的に変化した時期だったからです。大阪府は、保健所の所長、保健師、及び結核医療機関の医療従事者にDOTSと結核患者の治療評価のコホート検討会を行う体制を進める方針を示し、二か所の保健所でモデル事業をはじめようとしていました。DOTS事業と治療評価の検討会を進めていくには府庁に専任の担当医師がいることは不可欠でした。その役割を田村嘉孝医師が担うことになりました。大阪府は、大阪北部の吹田保健所と大阪南部の和泉保健所をモデルとして結核患者の治療評価事業をスタートさせました。2002年頃のことだったように思います。それまで保健所の結核患者管理は地区担当の保健師に任せしていましたが、保健所に感染症チームを設け、組織的に対応する体制とされました。それに加えて、保健師だけでなく保健所長、医師、診療放射線技師、事務職員に加えて、外部の医療機関や学識者を入れた結核患者の治療評価を行うこととなりました。それが数年後には全府下の保健所で実施されることとなりました。

21. 老舗の結核病院の刀根山病院が結核病床を廃止する

結核病院において結核を専門に診療する医師の確保が難しい状況となってきています。羽曳野病院

においては、亀田先生の後は高嶋先生が引き継ぎ、その後は永井先生と田村先生が引き継いでおられます。そのため、現在も羽曳野病院においては専任の医師で結核診療体制が維持されています。これに対して日本初の公立の結核療養所を起源とする刀根山病院においては結核病床が廃止され、また結核診療を行う専任の医師がいなくなっています。現在は、刀根山病院の結核外来は兵庫中央病院に異動された藤川健弥先生が担っています。

藤川先生はもともと刀根山病院の医師でした。刀根山病院に藤川先生が行かれることとなったのは刀根山病院の診療部長の前倉亮治先生のところに行き「刀根山病院は北摂地域の結核患者の診療を担う基幹病院であるのに主治医による結核患者の治療方針にバラツキがあるので院内で統制してほしい」とお願いにいったことが契機となりました。前倉先生は、院内の結核診療を統括するには病院には自分一人しかおらず、もう一人医師がいてくれたら行うと約束してくれました。それで藤川健弥先生の意向を伺い、藤川先生が刀根山病院の医師になられたのでした。結核勉強会にも藤川健弥先生は最初から参加してくれています。また、大阪府下の保健所の結核業務について保健所の保健師の結核患者支援に多大なる貢献をしてくれています。

22. NPO ヘルスサポート大阪が解散となる

あいりん地区の結核対策は、大阪市保健所及び分室、大阪社会医療センター付属病院、簡易宿泊所組合、NPO 釜ヶ崎支援機構、西成労働福祉センターなどが協働して進める体制ができあがりました。NPO ヘルスサポート大阪は、人的体制や財政基盤が脆弱であり、組織運営や事務作業を井戸さんにだけ依存する状態となり、組織のあり方の見直しが必要となっていました。NPO が頑張れば頑張るほど大阪市は NPO を安い委託先としか見なさない官民格差の扱いの不満も高まっていたことがありました。解散するかどうかの喧々ガクガクの議論がありましたが、NPO 設立当初の役割は終わったと判断され解散することとなりました。

23. 大阪公衆衛生協会を基盤とした STBK ワークショップがはじまる

財団法人大阪公衆衛生協会の話に移ります。大阪府知事に橋下徹さんが当選され、大阪府は外郭団体の大幅整理と補助金や事業委託の見なしが進められました。大阪公衆衛生協会の多くの事業は大阪府の委託事業でした。協会運営に府庁職員や市町村職員の手を借りていましたが、府庁の職員に支援していただくことも困難な状況となりました。事務所は大阪府の城東庁舎においていたのですが、大阪府の補助金がカットされただけではなく、家賃や光熱費などの支払いを求められ、収入がなくなり、支出だけが増える状況となりました。安くて便利なテナントを探して移転することとし谷町筋のビルに移転することとしました。また一般社団法人として生き残るのか、公益財団法人として存続するのか、南波正宗会長（元大阪府医療監）と池田政雄事務局長（元大阪府統計課長）と専務理事の当方で議論を重ね公益法人化をめざすことを選択することとしました。そして新たな公益事業として「ストップ結核パートナーシップ事業」を位置づけました。大阪公衆衛生協会は 1954 年に大阪府と大阪大学の関係者により創設された歴史と伝統のある団体でした。公益法人課に併せて事務局長の池田さんは 80 歳を過ぎており、また奥さまがご病気で看病が必要となり、退職されることとなりまし

た。池田局長と後任を探し、最終的に井戸さんにお願いすることとなりました。

井戸さんはNPOヘルスサポート大阪の解散の後もう責任ある仕事はできないと言わっていましたが、公益法人の協会事業の柱が「ストップ結核パートナーシップ関西」であり、結核の仕事であるとお願いし、引き受けてもらいました。ちょうど、この時期に国立医薬品基盤研究所（現国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所）におられた松田岳彦さんが羽曳野病院免疫内科の松本智成（大阪府結核予防会大阪復十字病院）と二人で、私のいる関西大学の研究室に訪ねて来られました。結核勉強会をしたいとのことでした。井戸さんと相談して公衆衛生協会の事務所がある双馬ビル（現ソフィア大手前ビル、大阪市中央区谷町一丁目3番1号 4階）で「結核勉強会」を行うことになりました。STBKは、事務局を大阪公衆衛生協会におかれていきましたが、ワークショップの企画運営をする人員がいるわけではなかったので、結核勉強会がその役割を担うことになりました。

24. 大阪公衆衛生協会が解散となる

公益法人化後、協会の会長は、南波正宗先生から高野正子先生に代わりました。高野先生は大阪府の保健所長を歴任されて高槻市保健所長をされておられました。退職とあわせて協会の会長にご就任をお願いいたしました。協会の事業としては中核市を集めた活動を進めたいと考えていたからでした。しかし、協会経営は、低金利で金利収入が激減、大阪府の財政再建のために補助事業削減、さらに企業経営が厳しく寄付金が激減し、毎年一千万円ほど基金を取り崩した運営をせざるを得ず、数年先に資金が枯渇することが現実となっていました。公認会計士より破綻するまえに清算処理した方がよいとの助言をいただきました。理事の中で解散手続の行政事務に精通されている清水秀都さん（現枚方市副市長）を清算人として2021年3月に解散手続が完了いたしました。高野先生には会長、井戸さんには事務局長となっていましたが協会の解散作業に巻き込むこととなってしまい、申し訳なく思っています。

25. ストップ結核パートナーシップ関西はなぜつくられたのだろうか

「ストップ結核パートナーシップ関西」のはじまりは当方が大阪大学にいた時に二つのことが重なったことではじまりました。一つには、ストップ結核パートナーシップという活動をWHOがはじめ、日本でも2007年に「ストップ結核パートナーシップ日本」が設立されました。これは「ストップ結核ジャパンアクションプラン」に基づき外務省、厚生労働省、（独）国際協力機構、（公財）結核予防会、製薬産業の官民連携により国内外の結核対策を促進し、結核の世界的流行を終息のための啓発するアドボカシー団体として設立されたものでした。現在、ストップ結核パートナーシップは、UNOPS（国連プロジェクトサービス機関）主催のStop TB Partnership（本部ジュネーブ）のパートナーシップ組織となっています。

当方に、「ストップ結核パートナーシップ日本」の森亨先生と田中慶司先生（元厚生労働省健康局長）から「大阪でも活動を行ってもらえないか」と相談してこられました。二点目として、当方は大阪大学を一旦退職して2007年度に大阪大学大学院医学系研究科が文部科学省の「健康医療問題解決能力の涵養の教育プログラム」を進めることとなり、このプログラムの特任教授になりました。

た。新しい大学院の社会人学生として白井千香先生（神戸市保健所）、田村嘉孝先生（羽曳野病院）、藤川健弥先生（刀根山病院）などに2008年4月に入学していただきました。この大学院のプログラムの一環としてストップ結核パートナーシップを行うことを考えたのでした。2010年に大阪大学銀杏会館でSTBKの初会合を開催いたしました。会には大阪府内だけでなく、兵庫県、和歌山県などの近畿圏の保健医療関係者30人くらいが集ってくれました。当方が、2010年4月に関西大学に異動したことにより、2011年度のSTBKのイベントは関西大学で行うことといたしました。2011年度は、「国際シンポジウム～世界から関西の結核を考える～」をタイトルとして開催いたしました。主催はストップ結核パートナーシップ日本・関西大学社会安全学部、後援を日本リザルツにしていただき、外務省・厚生労働省・大阪府・大阪市・財団法人大阪公衆衛生協会・財団法人結核予防会大阪府支部に協賛していただきました。会場の関西大学のミューズホールに200人以上の者が参加して下さいました。元大阪市長の關淳一先生も参加され発言をして下さいました。国際シンポジウムとして開催したので、WHOの元結核対策部長のJacob Kumaresanさんや米国ニューヨーク市の元結核対策部長のDr. Paula Fujiwaraさん、フィリピンのDr. Roderick Pobleteさんに講演をしていただきました。その後、駿田直俊（国立病院機構和歌山病院副院長）、田所昌也（兵庫県健康福祉部健康局疾病対策課長）、松本健二（大阪市保健所感染症対策監）、井戸武實（NPOヘルスサポート大阪事務局長）、田丸亜貴（大阪府立公衆衛生研究所感染症部細菌課主任研究員）、大井恭子（滋賀県甲賀健康福祉事務所健康衛生課主任保健師）、高山佳洋（大阪府保健医療部医療監）など近畿地方の結核に関わる保健行政や医療機関・研究所の方にご報告いただきました。下内昭（財団法人結核予防会結核研究所副所長）にもシンポジウムの外国人の発表の翻訳やまとめをしていただきました。

26. 大阪公衆衛生協会のSTBKワークショップの歩み

2012年度以降は大阪公衆衛生協会主催として開催することとなりました。2012年は大阪公衆衛生協会が主催し、ストップ結核パートナーシップ日本、国際NGOリザルツの後援をいただき、大阪キヤッスルホテルで国際セミナーとして開催しました。メインゲストとしてWHOのDOTS戦略を立案された古知新先生に講演をしていただきました。政治、行政、民間の世界の人々に参加いただくことができました。2013年度は大阪公衆衛生協会が公益法人となってからの初めての開催となりました。そのため「ストップ結核パートナーシップ関西」の結核セミナーは2013年度を第一回としています。開催場所は大阪病院年金会館でした。2014年は第2回結核セミナーとして、BCG研究所やキアゲン（QIAGEN）の支援の下、「あべのハルカス」で開催しました。2015年度はあいりん地区の結核対策に焦点をあてて西成区の西成市民館で第3回結核セミナーを開催しました。

2020年に新型コロナウイルス感染症が流行したことで勉強会はZoomを使って開催することになりました。大阪公衆衛生協会事業としてSTBKのセミナーが軌道にのったところでしたが財政事業の悪化の理由で大阪公衆衛生協会が2021年度に解散となりました。そのため、STBKの事務局を2023年に大阪大学医学部公衆衛生学講座教授に就任された川崎良先生にご無理をお願いして教室にしばらく置かせていただくことになりました。2023年度及び2024年度のSTBKのワークショップは阪大公衆衛生学教室を事務局として開催することになりました。新たな体制となった中での井戸さん

の訃報でした。そこで、2025年度のSTBKの第12回ワークショップは井戸さんを偲ぶ会として重ねて開催することいたしました。

27. おわりに

大学を卒業してからはじめて結核との関わりがはじまったと思っていましたがこれは大きな間違いでした。私の祖父母、つまり父の両親は父が小学生の時に幼児の弟2人を残して結核で死亡していました。親戚夫婦が家に移り住んで父と兄弟を育て、そこにおじさん夫婦の子ども達と私の兄弟が同じ兄弟姉妹のように生活するという不思議な家庭環境でした。先祖のことを何も知らずに大阪に出てきて、大阪で結核の仕事を関わることになったのでした。結核の仕事をさせるために誰かがシナリオをつくっていたのかと疑うような人生となりました。大阪で出てきたことによって、卒業後に亀田先生、井戸さんをはじめ多くの人々とつながることになりました。

ところで、井戸さんの追悼文集の作成を提案されたのは三浦康代さんです。「井戸武實」、「結核」ということとあわせて現在の結核勉強会までの流れについて書かせていただきました。井戸さんの追悼文を書く作業をはじめると、井戸さんの追悼を超えて、これまで私自身が大阪で結核に関わってきた方々の顔が次々に浮かび上がってきたので、そのことも書かせてもらうこととなってしまいました。井戸さんを追悼するにはそのような人々のことも想い出して書く必要があると考えたからです。しかし、思い違いも多々あると懸念しています。

井戸さんは、「無理です」、「できません」と言わない人でした。そのため、ついつい診療放射線技師の枠を超えた役割と業務を担わせることになりました。井戸さんには実に多くのことを頼ってしまいました。これまでの井戸さんのご貢献に深く感謝を申し上げます。



井戸さんが大阪府職員の最後の時期の写真（2006年9月26日）（写真撮影：高鳥毛敏雄）
茨木保健所管内の飯場の接触者健診を行うために井戸さんが藤井寺保健所から「はと号」を持ってきて夜間健診を行っている。

写真左は大阪府茨木保健所診療放射線技師島田真吾氏（現大阪府池田保健所地域保健課長）